

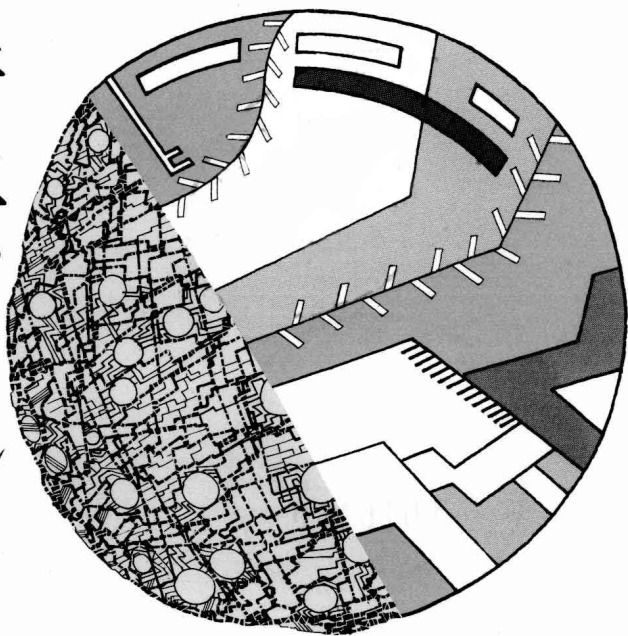
下駄の上の卵

井上ひさし

岩波書店



下駄の上の卵



井上ひさし

岩波書店

下駄の上の卵

一九八〇年十二月二〇日 第一刷発行 ©

定価一五〇〇円

著 者 井 上 ひ さ し

発行者 緑 川 亨

発行所 〒100 東京都千代田区二ツ橋一丁目五番地
鐵 岩 波 書 店

電話 〇三・二六五四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

第一章	球は転々……………	三
第二章	外野の堀……………	七
第三章	左翼手が追いついて……………	二五
第四章	遊撃手めがけて好返球……………	二三
第五章	遊撃手は振り向きざま……………	二七
第六章	バックホーム、タッチアウト……………	四一

下駄の上の卵

第一章 球は転々

毎年、終戦記念日が近づく——この日を終戦記念日と呼ぶか敗戦記念日と称するかによってその人間の考え方が試されるらしいが、ここではちかごろの風潮に右ならえしておこう——この国の新聞や雑誌は昭和二十年八月十五日についての文化人や知識人たちの短文や随想を恒例のように掲載するが、その多くがこれもまた恒例のように「あの夏の、あの日の午後、空はどこまでも青く澄みわたり、めくるめくような思いがウンヌン」といったようなまくらをふる。むろんこれはあの日の午後の解放感を、青く澄みわたった空に託して言っているのだと理解はできるのだが、修吉は右のような文章にでつくわすたびに軽い戸惑いをおぼえる。ちつともめくるめかぬのだ。というのは昭和二十年八月十五日正午、山形県南部の、人口六千の小さな古い宿場町の裏山で松根油の原料になる松の根っ子を掘っていた国民学校五年生の修吉の頭上には、青く澄んだ空など眼を皿にしても盆にしても見つからなかったからである。置賜米産地おきたまの中心としても県内には聞えていたこの宿場町の上空にあの日あったのは厚ぼったい雲ばかりだった。それどころか自転車でかけつけた年とった教師の「どうも戦さに敗けたらしい。もう今日は根っ子掘りはやめにしよう」という解散の合図で唐鍬を担いで山をおりようとしたときには雨さえ降りはじめていた。もっとも後年、自分のひそ

かに敬愛している小説家や評論家たちがまるで示し合せや申し合せをしたようにそろって「あの日の空は青く澄み、めくるめくように眩しかった」と大合唱するのでそれに引き摺られて修吉も「そうだったく青かった、あれは目にしむ青さだった」と余儀なく唱和した期間がある。奇態なもので唱えているうちに「あの日の空は……」という声がすると即座に「……青かった」と思い泛びすこしはめくるめきでしたが、そうなると今度は自分の記憶が余計者になった。そこで修吉は自分の記憶の方に×点^{ばってん}をつけ、付和雷同心と知的虚栄心とを繕^より合せて縄をない、そいつで自分の記憶を幾重にも縛り上げ頭の中の穴蔵へ投げ捨ててしまった。がやがてアイデンティティという片仮名が流行語になると、流行追従心をふたつに折って重ね合せ、その中央を資料という鋺^{なべ}でとめて一丁の鉄をこしらえ、穴蔵の底で埃をかぶっていた自分の記憶の縄を切った。と書いたのはなんのことかわからないが、ある日のこと彼は自己の存在証明とやらを求めて、昭和二十年八月十五日の山形県の日候を調べに気象庁へ出かけて行った。自分の記憶の上に厚く降り積んだ埃を払うために彼には事実というはたきが必要だったらしいのだ。気象庁で修吉は「昭和二十年八月十五日の鹿児島、最高気温三一・八度、湿度八六、空模様はれ。長崎、三一・四度、八二、はれ。広島、三一・八度、七五、はれ。高知、三二・九度、七九、はれ。大阪、三五・一度、六八、はれ。京都、三六・三度、七〇、はれ。名古屋、三六・五度、七六、はれ。東京、三二・三度、七九、はれ」という数字につづいて「仙台、二五・一度、九三、くもり。山形、三一・四度、八五、くもり。盛岡、二九・九度、八四、くもり。

札幌、二三・九度、八三、くもり」とあるのをたしかめ、それ以来、あの日の空は青かったという大合唱を耳にしても「じつは東北地方と北海道の空は灰色だったのだ」と念仏のように呟いて、もうたやすくはめくるめかぬ。などと妙な理屈を彼に代ってこねくりまわしていると読者の蟹轡を買いかねない、さっそく物語の発端部分にご案内しよう。

あの日から十ヵ月近くたった昭和二十一年六月四日の午後、ちょうどあの日と同じように雲の低く垂れ籠めるなかを、国民学校六年生の修吉は野球仲間横山正と、糍こしの匂いのぶんぶんする味噌を厚く塗った大きな握飯にかぶりつきながら、田の畔くを歩いていった。学校は皐月きつき休みのさなかで、ふたりは学校から割り当てられた、未帰還兵士を出している農家での苗運びや田植えをし終え、その報酬に握飯を一個ずつ貰って引き揚げてきたところだった。この地方は米作地帯なので農繁休暇が多い。この田植うどきの皐月休みをはじめに、七月上旬の田の草取り休み、十月の稲刈り休みとつづく。一月下旬には寒休かみもある。もっともこの寒休かみは農事暦とかかわりはない。この時分には鶏の羽根ほどもある雪が十日も、ことによると半月近くも降り続くので学校へ通えなくなるのだ。仮にスキーをはいても学校へ行くという感心な子どもがいたとしても、その子どもはだれからも賞められないだろう。せっかく出かけても学校は雪の下に埋まってしまっており見つけ出すのはむずかしいだろうからである。二、三時間、視力のなくなる雪目ゆきめにかかって帰るのがおちだ。下手をすると今度は自分の家が見つからなくなるおそれもあった。なにしろ雪は待てしばしもなく降り続

いているのだから。念のために注釈を付しておく、農繁休暇や寒休みで遅れた勉強は夏休みにそのおぎなひをつける。だから修吉たちの夏休みはいつも三週間もない。

田の畔から小さな川に出たふたりは流れに膝から下を漬けながら、しばらくの間、セネタースの
大下弘外野手のはなしに夢中になっていた。前年の秋、明治大学の杉並和泉球場の右翼の木立へぼ
んぼん本塁打を打ち込んでいるところを見込まれてセネタースへ引つ張られ、十一月下旬の東西対
抗戦でいきなり東軍の五番打者として登場し猛打をふるったこの天才を、ふたりは人間に降格した
天皇にかわる生き神様としてあがめたてまつっていた。この四月、雪どけを待ちかねて作った自分
たちの野球チームに——といってもそれは、ビー玉をひとつ芯にし、乾した里芋の茎をぐるぐる巻
きつけ、その上にひょうたんの形に切り抜いた布を二枚かぶせて、畳屋の息子をそそのかして持ち
出させた糸で縫い合わせたボールを、丸太を削ったバットで引つばたき、軍手をもとに藁とボロボ
でそれらしい恰好にしたグローブで掴むという、三角ベース野球チームにちよつと毛の生えた程度
のものだったが——小松セネタースという名前をつけたのも、大下弘が好きだったせいによる。と
ころが春のトーナメント戦でも打ちまくるだけ打ちまくっていたその大下弘が正式戦になるとさっ
ぱりで、四月二十七日の開幕戦から十九試合つづけて本塁打なし、ふたりを落胆させた。守り本尊
の不振は小松セネタースの成績にも影響し、日曜日ごとに鎮守の森の横手の公園で行う小松ジャイ
アンツとの定期戦に五回連続黒星を重ねている。とはいってもふたりの所属するチームの不成績を

すべて大下弘の責任にしてしまつてはいけないだろう。むしろ九割ぐらいはボールのせいであるといつていい。練習を里芋の茎ボールでやっている修吉たちにとって試合で使用される軟式ボールは、裏山に行くときよくでつくわすまじ蝮よりもはるかに扱いにくかった。里芋の茎ボールは二回目のバウンドから弾まなくなり地面を転がってくるだけだからできるだけ早く前進しつまみあげるのがこつだが、軟式ボールはいつまでも跳ねている。前進すれば弾みが大きくて頭の上を抜かれてしまうし、待っていると案外、球足がのろくて打者を一塁に生かしてしまう。それでいて捕球してみると、それがゴムというものの力か、なんとなく侮りがたい勢いがあつて軍手と藁とボロ布で出来たグローブをぐいと押し、弾き、はね飛ばす。そればかりか軟式ボールはときとして、冬の朝に雪を吹き飛ばしつやつやってくる回転雪掻車の羽根車よりも早い回転で地を這う。掴もうとすれば逸れ、上から押えつけようとすれば後戻りし、掴おうとすれば腕を伝わって肩まで駆けのぼりまるで鼠火火を相手に試合をしているようだった。修吉は正と交代で投手と捕手をつとめているのだが、軟式ボールはカーブが投げにくい。里芋の茎ボールにはまがりなりにも縫い目というものがあり、こいつをうまく利用するとボールはまがる。ところが軟式ボールは修吉たちの投げ方では外へ逃げようとしてはくれなかった。またすこしぐらい当りどころが悪くても一所懸命バットを振れば里芋の茎ボールは内野の頭を越えてくれた。しかし軟式ボールにはそういう大らかなところがなかった。一糰上を引っぱただけでぼてぼてのゴロ、五耗下に当てただけで凡飛球という具合に気むずかしい。軟

式ボールで練習ができれば球癖にも慣れて、ジャイアンツと五分に戦える自信はあった。だいたい相手は、幼稚園出身者だけでかためているとはいえ、同じ六年生ではないか。

たびたび横道にもぐり込んでわずらわしいようであるが、「幼稚園出身者」について注釈をまたひとつ加えておこう。この町の人たちにとってこの言葉は特別な意味があるからだ。戦争のはじまる前まで町には幼稚園がひとつあった。町第一の名刹千松寺の経営になるもので、園児は有力者の——たとえば町長の、助役の、地主の、造り酒屋の、呉服屋の、旅館の、町立病院の先生の、銀行支店長の、駅長の、郵便局長の、警察署長の——子弟に限られていた。したがって町の人たちにとって幼稚園は良家の子供の行く所えんどこという意味を持つ。昭和六、七年から中国との戦争がはじまったころにかけて町には軟式野球が流行し、チームが六つもできたが、メンバーのほとんどはこれらの有力者たちであった。町の人口の七割を占める百姓たちにはむろんボールを引っぱたく余裕なぞなかった。ある者は、この地方で南京婆なんきんばばと呼ばれている人買い婆さんに手をひかれて都会の遊廓へ行くのを拒むわが娘の顔を涙ながらに引っぱたくという不幸で疲れ果てていたし、あるものは田ん圃で痩せこけた牛の尻を引っぱたくので手一杯で、いまだ改めてボールなどを引っぱたく気にはなれなかったのだ。小店をささやかに営む人たちや大工や箆箭屋などの職人たち、それから小役人たちも町にはかなりいたが、彼等はおもっぱら観衆の役をつとめた。そして旦那衆や上司たちの快打や好守に大きな拍手を送り、へまをしでかすと小さく手を叩いた。有力者たちは熱心にプレーをして

いたけれども、伎倆^{うづ}の方はたいしたことがなく、小さく手を叩く機会が断然多かったから、彼等は日頃の鬱憤^{ふん}をたつぷりとはらすことができた。とまあそんなわけでジャイアンツの連中がいま持っている皮のグローブや軟式ボールやバットは、いずれもこのころ野球に血道をあげていた父、もしくは兄からのおさがりなのである。真中に帯、そして小さな四角のいぼいぼが無数にある「学校ボール」、真中に帯、そしてその帯から上と下へ波形の刻みの入った「大衆ボール」、軟式ボールの上にさらに皮を張った、一見、硬式ボールのような「チャンピオン・ボール」、それからアメリカの国會議事堂の円屋根をふたつ上下に合わせて、合わせ目に帯を巻いたような「健康ボール」など、ジャイアンツの連中はいろんなボールを持っていた。が、それを時と場合によって使いわけてくるから腹が立つ。修吉たちが攻撃する番になると、向うの投手はチャンピオン・ボールを使う。こいつには縫い目があるから球がよくまがる。だから修吉たちは空振りばかりした。向うが攻めるときは、投手板の修吉めがけて連中は「おい、これ、使わせてやるよ」と、大衆ボールを投げてよこす。このボールには反撥力があつてよく飛ぶ。そこでセネタースの外野手は忙しくなるのだった。しかもこの大衆ボールの波形の刻みは大ざっぱで、そのせいかしばしば不規則にバウンドする。これでは内野の方だつて忙しくならないわけには行かない。セネタース五連敗の原因が九割がたボールのせいによると前に書いたのには、これだけの事情があつたのだった。

「大下だつて打ったんだ、この次の日曜にはおれたちもがんばらなくちゃ」

正が岸にあがって、ベルトがわりにズボンを支えていた真田紐さなだひもの結び目をほどこいた。真田紐には藁草履がぶらさがっている。

「七打数五安打、うち満塁本塁打一本、打点五。すごいなあ、大下は」

正は藁草履を抜きとって、それをバットに見立てて構えてみる。前日の六月二日午前十時半から西宮球場でセネタースと中部日本の四回戦が行われた。スコアは十五対十四、セネタースが打ち負けたが、ひとり大下は大当り、待望の第一号本塁打を打ってくれた。おまけに先発投手として二回三分の一投げてくれた。彼のこの活躍ぶりがさっきからふたりの話題を独占している。

「一度でいいから大下の打つところをみてみたいな。修吉君、そう思わないか」

「それは思うよ」

修吉も水からあがる。そして正がしたように真田紐に通しておいた藁草履を抜き取った。幼稚園組を別として、このあたりの子どもたちはほとんどは真田紐でズボンを支えている。履物は藁草履である。これが幼稚園組では、おさがりの古ベルトに下駄ということになるのだが。

「けど、思ってもむだだ。大下を見るには東京さ行えがねばならねえもの。どうやって東京さ行えぐのだ」

「汽車に乗ってじゃないか。きまっているだろう」

正は頬をふくらませ、地面へ投げつけるように藁草履をおいた。それを見て修吉は母親がいつ

だったか「鶏肉屋に縁故疎開している正って子はおまえの友だちだろう。そうだったら『東京』って言葉は禁物だよ。お父さんは空襲で亡くなったし、お母さんは病気で倒れちゃうしで、あの子はしばらく東京へ帰れないらしいからね」といつていたのを思い出した。

「そうか。たしかに汽車で行ぐしかねえな」

修吉はそこで曖昧に相槌を打ちながら足の指に藁草履の鼻緒を引っかけた。

「でもセネタースっておもしろいチームだね、修吉君。だって、セネターが一言、ライトが長持、それからキャッチャーが熊耳、おかしな名前の選手ばかりだ」

「んだな、そう言えばおかしいな」

「顔を見てみたいな。熊耳なんてどんな顔をしていると思う」

「さあ。熊と似てっかな」

「案外いい顔してるんじゃないかな」

「んだかもな。で、どうする、これから行ってみつか」

「東京へかい」

「まさか。置賜博品館へ、だよ」

「あ、そうか」

「こっからだと直ぐだげどな」

「うーん……。よし、勇気を出してやってみようか。大下もとうとう打ったんだし、こんどの日曜こそはジャイアンツをやっつけてやんなくちゃ。それにはまず軟式ボールだ」

「ようし……」

修吉は勢いをつけて土手を川下に向って歩きだした。川は間もなく犬川という、このあたりでもっとも大きな川に合流する。その合流点に町で一番の造り酒屋「祝瓶」の経営する置賜博品館があり、そしてその博品館のどこかに、母親のいったことがたしかならば、軟式ボールが五つや六つは転がっているはずだった。

ところでこの情報を母親から聞いたのは四日ばかり前の夜のことである。軟式のボールが欲しい、とそればかり考えながら横になっているうちに、今年の一月、家であっている地方紙にへへえと思うような記事が載っていたこと、そしてそれを切り抜いて机の中にほうり込んでおいたことを修吉は記憶の底から引き出した。さっそく布団から飛び出してその切り抜きを読み返した。それから店において売物の半紙を一枚失敬すると、修吉は天皇陛下にあてて、

「お願いいたします。どうか軟式ボールを政府が作るようお命じになってください。臣広沢修吉等は軟式ボールがなくて困っております。全国に少年野球チームがいくつあるかぼくは知りませんが、どうか一チームにボールが二個ずつわたるようにお手配をおねがいします。チームの数は文部省に調べさせればよいと思います。ぼくの聞いたはなしでは昭和十七年からずうっとボールは一個も作